

Ride on time

Vol.3

上田西高卒

千西一週 特別特集号
2025年3月28日 発行
上田西高等学校新聞委員会編集局
編集局長：塚田 礼
新聞委員長：大澤 理子

いよいよ開幕
プロ野球選手の今シーズン。

Bananas

34

オリックス・バファローズ
横山 聖哉 (2023年度卒)
権田 琉成 (2017年度卒)

阪神タイガース
高寺 望夢 (2020年度卒)

読売巨人軍
笹原 操希 (2021年度卒)

歓喜の1位指名から1年半。

▼2023年のドラフトでオリックス・パファローズから1位指名を受け、チームメイトに胴上げされる横山
撮影=大田 すみれ、2023年10月26日 上田西高校野球グラウンド

縁 ENJO



3月28日(金)に今年もプロ野球が開幕を迎え、上田西高校出身の4名の選手が勝負の1年を戦うことになる。オリックス・パファローズには2023年のドラフトで2名の選手が入団した。1位指名の横山聖哉(23卒・進学Ⅱ上田第四)は本校初の高卒ドラフト選手。7位の権田琉成(17卒・進学Ⅱ川中島)は大学から社会人を経由しての指名となった。本校出身のプロ野球選手が同じ年に指名という快挙を受け、編集局では入団会見取材するにとどまらず、プロ1年目を経験した2人に1年を振り返ってもらおうと大阪舞洲の球団施設を訪れた。年末に自主トレのため母校を訪れた2にも追加取材を行った。

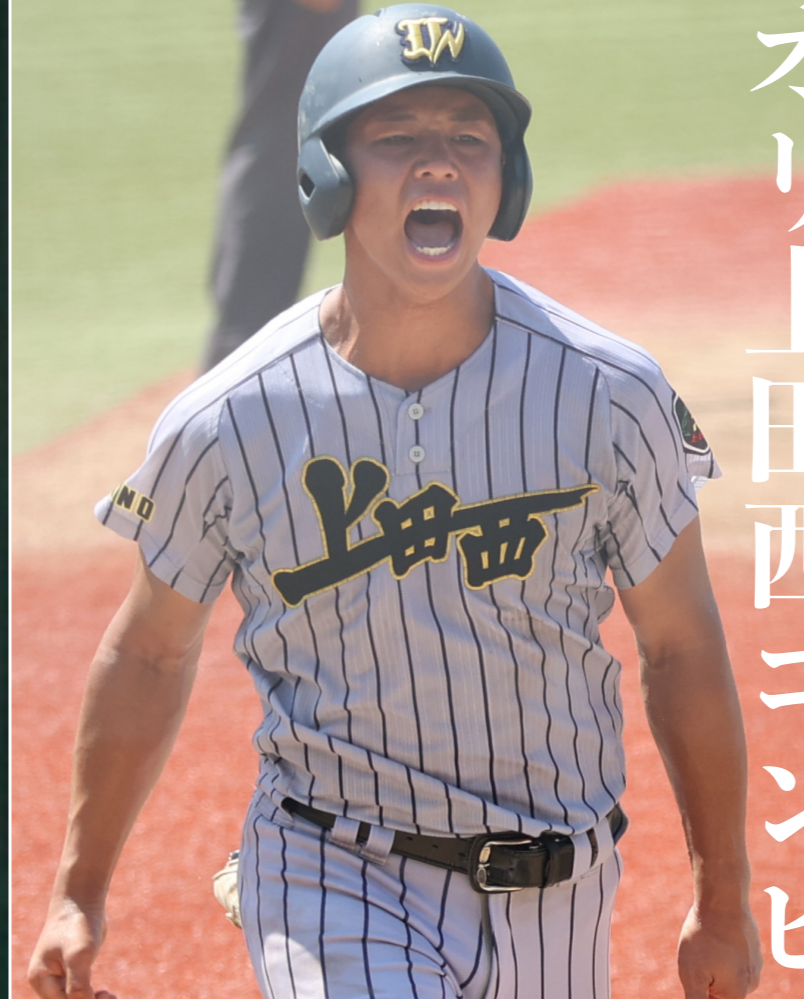
また、阪神タイガースに所属し、初の開幕1軍が決定した高寺望夢(20卒・進学Ⅱ真田)や今年支配下登録を狙う読売巨人軍所属の笹原操希(21卒・進学Ⅱ裾花)についても野球部の吉崎琢朗監督に取材を行い、現状や今シーズンに期待することなどを聞いた。



2軍戦に出場する横山 撮影=金井 茉優



キャンプで投球練習を行う権田 写真提供=権田選手



2023年長野大会準決勝で雄叫びをあげる横山 撮影=樋口 華



高校時代の権田投手 写真提供=杉原 妃奈さん

勝負の2年目へ。

オリ上田西コンビ

2023年度 ドラフト7位

権田

琉成

×

横山

聖哉

2023年度 ドラフト1位

17卒 川中島中～上田西高～明星大～TDK～オリックス・バファローズ

権田は1軍のマウンドに立つことはなかった。それゆえに今シーズンにかけての思いは強いはずだ。牧野コーチは権田のストロングポイントを「真っ直ぐも強いですし、変化球もいいキレがある」とし、今シーズンに向けて「その精度をあげることが一番ですね」と話した。

昨年バ・リーグ4連覇を逃したバファローズは2軍投手コーチを務めている岸田護監督が新たに指揮を執る。薫陶を受けた新指揮官のためにも今シーズンでの飛躍はマストだろう。社会人経由の即戦力として勝負のシーズンが幕を開けた。

(小林 未侑)

23卒 上田第四中～上田西高～オリックス・バファローズ

「身体が強くて怪我をしないということがまず凄い。体力もあるのでたっぷりと練習ができ、言われたことをしっかりやり抜く真面目な性格も持っている」とした。上田西では不動の遊撃手として1年秋から活躍していたが、1軍戦では三塁手として起用された。慣れないポジションでの守備について、小島コーチは「2軍で数回しかやっていないにも関わらず、あれだけ守れるということはずいぶん。適正がある」と評価。改善点としては、「もう一度、ボールを捕ってからスローイングまでの流れの基本的な作業を積み重ねること」と話し、「もともと肩が強くてしっかり投げられるため、送球の精度をあげるだけだと思います」と続けた。オープン戦での出場は1打席のみ。2軍戦では6試合に出場し失策は0。今季は安定した

守備を見ることができそう。小島コーチは今シーズンに向け「将来的にはレギュラーを当然取らなければいけない選手なので、最初からでも途中からでも、1試合でも多く1軍の戦力になってほしい」と期待を込めた。横山のもう一つの持ち味として挙げられるのが、力強いバッティングだ。昨季は1軍の舞台を経験することができたが本人は「結果を出すのは難しい」とプロのレベルの高さを痛感した。高橋信二2軍打撃コーチは昨季の横山について「1軍も経験できましたし色々な発見があったと思います。結果が出なかったからと言って決して無駄な1年ではなかったと思うし課題が明確になったことが大きな財産になったのでは」と振り返る。1軍の舞台で6安打を放ち存在感は出せた。「高卒1年目と言うところで見たらすごい対応力だったし、球界を代表する良い投手から安打を放つ場面もありそこは自信になったと思います」と高橋コーチ。今シーズンに向けては「バットコントロール、対応力、打撃センスはいいものを持っている。そこにステップアップするために長打力を磨いてほしい」と成長を求めた。オフに打撃フォーム改善に取り組んだ横山。身体つきも大きくなり、オーラが漂う。ファームでは打率こそ振るわなかったものの、鋭い当たりも随所に見せている。勝負の2年目は、まずは1軍昇格を目指す。(小林 未侑)

横山と同じく、昨年度のドラフトで7位指名を受け、バファローズの一員となった権田。上田西高では1年次に甲子園を経験(本人はベンチ外)。最上級生となった3年次には才能が開花し150kmに迫る直球を武器に活躍した。甲子園には届かなかったが、進学した明星大学でも頭角を現し、4年次の春の首都大学野球二部リーグではチームを優勝に導いた。2022年にはU-23の侍ジャパンにも選出され守護神を務め、卒業後はTDKに入社し日本選手権を経験し待望のプロ入りを果たした。牧野塁2軍投手コーチは、権田のプレー面・メンタル面・人間性等で成長した点について、「マイペースで、黙々と自分のやるべきことをやる性格。この一年で人間的にも投手としても全部が成長していると思います」と振り返った。練習に臨む姿勢については、「やることをしっかりとやる選手なので、自分の中で納得したことを黙々とやるタイプ」と評価した。昨季はシーズン終了直前に1軍に昇格しプロ初登板の期待も高まったが、権田が1軍のマウンドに立つことはなかった。それゆえに今シーズンにかけての思いは強いはずだ。牧野コーチは権田のストロングポイントを「真っ直ぐも強いですし、変化球もいいキレがある」とし、今シーズンに向けて「その精度をあげることが一番ですね」と話した。

また、「いい時は抑えられますので悪い時にどう抑えられるかということが大事だと思います。同期入団の同級生の投手が1軍で投げている姿を悔しい気持ちで見ていると思いますので、今シーズンは『自分が』となってほしいと思います」と続けた。オープン戦ではここまで1試合に登板し1回を投げ2失点。しかし2軍戦では3回を投げ完璧に抑えている。調子が悪い時にどう抑えるかという課題については引き続き改善に向け取り組む必要があるという。プロ1年目では配置転換も経験した。2軍戦に31試合登板した権田だったが、チーム事情もあり先発に転向。本人は「昨季はケガ人が多かった影響で先発に配置転換となり難しい部分もあった」と振り返る。牧野コーチは先発投手としての権田のパフォーマンスについて「良いボールは持っているの、長いイニングを投げることでバッターの抑え方や力の入れ方などを覚えてほしいと思っています。それが彼の今後にもつながっていくと思っています」と明かした。

2024年シーズン
1軍成績：出場なし
2軍成績：31試合 防御率：3.21
2勝2敗1H



権田 琉成

笑顔で取材に応じる権田 写真撮影=小林 さら、オリックス選手寮青湊館

「直ぐ」と解答。「真っ直ぐのキワのコントロールを磨きたい」と活躍を誓った。今季から岸田新監督が指揮を執る。「まもさん(岸田監督)はファームからずっと教わっている。まもさんはみんなを見るからだからどこかしらでチャンスがあると思う」と話した。

直球に磨きかけ飛躍誓う

プロとしての初めてのシーズンを終えた権田。昨シーズンは2軍で31試合を投げ防御率は3点台前半を記録し、先発起用も経験。「先発は難しかったです。5、6回は投げて試合を作らなければいけないし、大阪はなんせ暑い(笑)。中継ぎに比べ調整は楽だったんですけど、先発は投げる日が決まっている。中継ぎは突然出番が来る。自分は中継ぎの方が好みでした」と話した。夏に調子を崩したが、秋に盛り返し直球は150kmを超え状態が上向いたところで1軍から声がかかった。シーズン最終試合での昇格となったが、その試合はエースの宮城大弥投手の最優秀防御率のタイトルと規定投球回数達がかかった大一番。エースが7回1/3を投げ切れれば権田にもチャンスがあった展開だった。しかしあいにくの降雨で試合は7回でコールドに。自身の登板はなく宮城投手もタイトルを逃した。「裏で気持ちちは作っていた。チャンスがあれば投げたかった」と悔しさを滲ませた。

同期入団の社会人トリオ高島泰都投手(T)、古田島成龍投手(K)、そして権田(G)の3人の選手の名前の頭文字をとってファンの中で親しまれている「TKG」という愛称がある。9月の取材時は、高島選手と古田島選手は1軍で活躍しておりファンの中では「あとは権田だけ」「Gだけだ」との声も聞かれ、権田に「待ってるね」と声をかけるファンもいた。この事に対し本人はプレッシャーを感じており「自分のペースで頑張りたい」とコメント。しかしシーズン最終試合に権田が1軍昇格を果たした際は3人が揃った。「やっぱり楽しかったですね」と権田。3人でご飯に行くこともあるといい「来年は3人であがれたらいいね」と話したそう。3人それぞれ持ち味が異なっているといい「高島は横から投げるからボールがシュート回転する。キヤッチボールすると突き指するから高島とはキャッチボールしません(笑)」と話した。昨年度同期入団した社会人トリオの活躍も覇権奪回には必要不可欠だ。(小林 さら・小林 未侑)

2024年シーズン
1軍成績：12試合 打率.150
6安打 2得点 3失策
2軍成績：86試合 打率.223
69安打 1本塁打 22打点
24得点 4盗塁 17失策



横山 聖哉

笑顔で取材に応じる横山 写真撮影=小林 さら、オリックス選手寮青湊館

謙虚さ忘れず1軍で活躍を

プロ1年目のシーズンを終えた横山に取材を行った。昨シーズンの成績については「高校野球とのステージが全然違うので結果を出すのが難しかった。それでも1軍で12試合に出場し6安打を放った。1軍で経験した公式戦は「ずっと夢であり憧れの場所だったので楽しみだったしワクワクした」と横山。記念すべきプロ初安打は西武ライオンズの高橋光成投手から放った。球界を代表する投手との対戦については「真っ直ぐも150を超えてくるし身長が高く角度もある。変化球の精度も凄かった」と語った。

5月に昇格するも月末には登録を抹消。8月末に再昇格を果たすも9月2週目には再び抹消になった。「結果を見ればわかるように打っていない。課題が見つかったのでものを2軍でしっかりと見つめ直します」。中嶋聡監督(当時)からは「身体能力やバッティングなど持っているものがあるからそれをしっかり使えればいい」というアドバイスを受けた。しかし自分では「持っているものを発揮できていない」と感じているという。2軍では多くの試合に出場し規定打席に到達した。「他のチームを見ていると出たり出なかったりの選手もいる中で自分は結構使ってもらったので期待されていると感じました」と振り返った。1、2軍合わせて多くの試合に出場したこと経験値は稼いだ。特に印象に残っているのが中日ドラゴンズの浦井秀章投手と東北楽天イーグルスの岸孝之投手。「球速以上に早く見えるストリートや配球、打者の打ち取り方など知っていた」とベテラン選手の技巧を凝らした投球に舌を巻いた。

守備面では2軍で17失策と苦しんだ。2023年は選手権長野大会で連続イニング無失策記録を樹立したチームの遊撃手として優勝に貢献したが、ここでも高校野球からのステージアップに苦戦。「打球が速いのでその処理や送球に苦しんだ」と横山。持ち前の強肩を生かし、高校野球では定評があった守備で魅せられるかにも注目が集まる。また、今シーズンに向けて「ゴールディングクラブ賞という目標は変えずに、1年目のシーズンの結果よりも上回る成績を残して1軍で活躍できるようにしたい」と開幕を見据えた。

オフには高校の先輩で読売巨人軍の笹原とアジアウインターベースボールリーグで共闘し優勝に貢献。課題である150オーバーの直球への対応についてはある程度感触を掴んでいるという。しかしここまでオープン戦では1打席のみの出場に止まり2軍が主戦場となっている。2シーズン目が始まりを迎え「ドラー」も過去のこと。「ドラフト時に掲げた『謙虚』という言葉は常に意識し続けている」という横山。驕らずに謙虚にそして着実に成長を重ね、1軍で活躍する姿を上田市民やバファローズファンは心待ちにしていく。(金井茉優・小林未侑)



選抜甲子園で打席に入る笹原
撮影=清水 舞子(生徒会広報)



代替大会で打席に立つ高寺
撮影=櫻林 生成



甲子園で守備につく横山
撮影=水出 楓香

高寺望夢 笹原操希 横山聖哉 4年で3名。 高卒プロ野球選手誕生の要因とは？

インターベースボールリーグに派遣されると、決勝戦では3打数2安打2打点をマークし優勝に大きく貢献した。NPB選手トップの17安打、打率3割超の好成績で来季の支配下登録に向けアピールが続く。2軍戦でもここまで勝負所での活躍が光る。

年末年始休業には、プロ野球選手4名を含め社会人・大学野球で活躍するOBが本校の野球グラウンドで自主トレに励んだ。その姿を見ていた現役の選手達には大きな影響があったはずだ。プロ野球選手は野球協約の規定で高校生への指導が禁止されているが、プロ選手の自主トレを間近で見ていると感じている選手もいたし、技術的に上手くなりたいと参考にしようにと見ている選手もいた。彼らにとってすごく貴重な経験になったと思う。毎年このような機会があればいいなと思った。そのためには全員に活躍してもらおうと「前提」と吉崎監督。

では、彼らは高校時代特別な存在であったのだろうか。吉崎監督は監督就任後、高寺・笹原・横山の3選手を高校時代直接指導した。3人とも「多

少センスはあったのかもしれないが、飛び抜けてという感じではなかった」とし、全員に共通していたこととして「技術練習や食事面ともに自分でやると決めたことはとことん最後までやっていたこと」を挙げた。「こちらが何かしたというわけではなく、本当に彼ら自身が努力した。諦めずに継続して取り組んだ努力こそが彼らの強さになっていた」と振り返った。

4年で3名の高卒プロ野球選手を輩出している上田西高校野球部だが、その要因の1つとして、選手達が自分の決めた目標を達成するために努力できる環境が整っていることがわかった。各方面で活躍する卒業生が学校で自主トレを行っていることも刺激になっている。現役プロ野球選手が活躍すればさらに後輩達の奮起に繋がるはずだ。

(小林 未侑)



年末年始に自主トレでグラウンドを訪れた、現在プロ野球で活躍する本校卒業生の4人 撮影=斎藤 慈生



上田西高校野球部

吉崎 琢朗 監督

現在プロ野球で活躍する卒業生について語る上田西高校野球部の吉崎監督 撮影=大澤 理子

近年、上田西高校から多くの高卒プロ野球選手が誕生している。4年で3名の高卒プロ野球選手誕生は県内では異例のことだ。全国的に見ても一部の超強豪校を除き滅多にあることではない。そんな上田西高校から誕生したプロ野球選手の高校時代の様子や現在の状況について感じていることを吉崎琢朗監督に聞いた。

監督自身もプロ野球選手輩出が続いていることに驚いているというが、その一番の要因として「スカウトの来校が増えたこと」を挙げた。「選手がスカウトの目に留まるのがなければプロ入りはない。ここ数年でそういった土壌ができたことが大きい」と話す。本人の努力もさることながら「全国から注目されるようになったこと」「プロ野球のスカウトが練習や練習試合を見に来ていること」などがチームの雰囲気

にプラスの影響を与えている。

今後は見事プロ入りを果たした選手達が結果を残せるかどうか注目が集まる。吉崎監督は4名の現役プロ野球選手の昨季の成績を踏まえ「今年は全員が勝負の年になる」と話した。昨年度オリックス・バファローズから1位指名を受け、期待の高まる横山に対しては、「ドラフト1位で入団し、与えられたチャンスをこれからどう生かせるかが重要だ」とした。昨季は1軍の試合に12試合出場し経験を積んだ。現在来季に向けバッティングを中心にレベルアップを図り、打撃フォームの改善

にも取り組んだ。春季キャンプの視察に訪れた侍ジャパン井端弘和監督からも名指しで絶賛されるなど各方面からの期待も大きい。

横山と同じくオリックスから7位指名で入団した権田については「社会人からの入団で常に即戦力として期待されていると思う」とした。昨年10月には待望の1軍プロ初昇格を果たすも登板はなかった。同期入団の社会人トリオ「TKG」の一角を担いファンからの期待も大きい。これからの活躍に期待が高まる。

阪神タイガースに7位指名で入団し上田西史上初めて高卒プロ野球選手となった高寺はプロ5年目。新たにチームを率いることになった藤川球児新監督の元、キャリア的にも勝負の年になる。昨季2軍で最多安打のタイトルを取った売り出し中の若虎は、春季キャンプで藤川監督からMVPに指名されたように新指揮官から期待が寄せられる様子が伺える。オープン戦でも複数ポジションで積極的に起用されると、一時は打率は3割半ば、チーム打点王を記録。初の開幕1軍を掴み取った。育成4位で読売巨人軍に入団した世原については「まずは育成から支配下登録を目標に。ウインターリーグでも活躍する姿を見せた。支配下登録に向けてこちらも勝負の年である」と話した。昨年は育成選手ながら2軍の試合に出場する機会が増え、打率2割超、2桁打点を記録した。さらにアジアウ